

「手作りおもちゃ」の制作で育つ力と教師の役割

平松清美

文化創造学部文化創造学科初等教育学専攻

(2008年11月5日受理)

Child Development through the Production of Handmade Toys and The role of the Teacher

Faculty of Cultural Development, department of Cultural Development,
Major in Primary Education,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

HIRAMATSU Kiyomi

(Received November 5, 2008)

1 研究の目的

自分で作ったおもちゃで遊ぶ子ども達の表情は満足感に満ちており、生き生きしている。

先日、厚紙で4歳児Aと一緒に「ぴょんちゃんかえる」を作った。

厚紙に絵を描き、折って切る。そして、ゴムを付けるという簡単な作業である。一時間もかからずにできた。A児はゴムの力で高く跳ぶカエルを見て、感激をしている。

「わあ、すごくとんだ。」「さっきより、もっと高くとんだ。すげえやあ。」「ほら、もうすぐとぶよ。いちにのさん。」と何度も繰り返し、高く跳ぶおもしろさに夢中になり、時を忘れて遊ぶ。なぜ、こんなに面白いのか。それは自分で作った「おもちゃ」だからである。そして、作ったおもちゃが動くからでもある。また、自分でイメージしたものを描いて色を塗り、折る、切る、ゴムを付ける。など、手と頭、目などの五感を使って作るところに大きな満足感や充実感があるからであろう。

幼児は遊びながら「なんでとぶの?」と疑

問も投げかける。「ゴムっておもしろいね」と新しい発見をする。ゴムの不思議に興味関心を持つ。感性や創造性はこうして育つのである。更に、自分で作った作品に愛着を持つ。

市販のおもちゃははじめから完成したものであり、子どもは受動的になる。手作りのおもちゃは完成するまでの過程が楽しい。私は創り上げる過程にこそ、感性、知性、創造性などが培われると考えている。

なぜなら、作っているときにこそ、作者なりの感性や創意性が存分に発揮される。そして、失敗をしたり、それを乗り越えたりして作るおもしろさを体感する。更に、もっとよりよくしようと意欲が湧き、智恵を出して工夫すればするほど、おもしろさを実感する。

だから、生き生きと遊び、遊び方も工夫するようになると思う。「自分で作ったよ」という「つくる喜び」や自信はこれからの生きる力の基となるであろう。また、苦勞して作ったからこそ、作品に対する愛着も感じるようになり、ものを大切にすることが自然に育つ。

教師をめざす学生も自らが体験し、この手作りによる「動くおもちゃ」の魅力や利点はどこにあるのかを追究する。

学生は手作りによる「動くおもちゃ」を制作することによって、「つくりだす喜び」を体感し、手作りによる「動くおもちゃ」の魅力に迫り、自らが実感したことや学んだこと等を明らかにする。さらに、活動を通して幼児にどんな力が育つのかを追究し、教師としての役割を考察する。

2 仮説と方法

21世紀を生きていく現代の子ども達にとって、「ものづくり」は個人的な教養的なものというより人間が生きていくために欠くことのできない重要な感性や創造性を養うものである。それを自由に自己表現する最高の活動でもある。また、幼児自身が本来持っている感性や創造的な力をどこまでも伸ばし、その力が花開くことを援助する日常的な、平凡なもの作りの活動こそ大切にされなければならないと考える。

「物」があふれている現代と比べ、「物」のない時代には、身近にある材料を工夫して、生活に使う物や遊びに使う物を作っていた。

「知恵を出す」「考える」「つくってみる」などの活動は自己実現の喜びにつながり、創造的行動力に富む人間を育てることになると考える。

そのためには、自分の思いのままに表現を楽しむ時間を確保したいものである。

苦労や努力を重ねて自己の思いを存分に制作に打ち込み、創造的に表現することが創り出す喜びとなり、心が満たされることになる。そこで

(1) 幼児が自分の力で作品の完成まで打ち込める素材を準備する。そうすれば、苦手意識が取り除かれ、制作の過程で「自分でで

きる」ことを体感し、自信が付く。幼児は進んで持てる力を働かせ、つくりだす喜びを味わうことになる。

- (2) 「自分の力でつくる」ことを貫く。そうすれば、教師や親に頼らないで思う存分、自由に表現活動を楽しむことができる。また目標に向かってつくり続ける態度や発想力、構想力、創造力が育成され、目標を現実しようとする感動が心を癒し、心身の調和的発達を促す。
- (3) 制作活動の過程を通して一人一人の可能性やよさを見つけたり、正しい道具の使い方を教えたり、適切な認め励ましの「言葉がけ」をしたりする。そうすれば、自信を持ち、材料や、用具の扱い方に慣れ、造形感覚や技能が働き、美的感覚を高める事ができる。
- (4) つくった作品でたっぷり遊ぶ。教師は制作中の態度や気持ち、表現の面白さなどを沢山見つけて言葉に表す。そうすれば、作品のよさを味わう感性、遊びを通した仲間との交流ができる。
- (5) 学生自らが「手作りおもちゃ」を制作し、失敗体験、考える面白さ、つくりだす喜びを体感し、自らの感性、創造性を伸ばす。そうすれば、教師としての役割を自覚し、適切に指導ができる力を付けることができる。

3 研究の内容

本研究は幼児4～5歳を対象とする。なぜなら、4～5歳児にもなると興味・感心が高まり、自発的に、主体的に物事に関わり、何を作りたかという目的を持つことができる。また、子どもらしい自由な発想で個性を発揮しやすく、気持ちを表現しようとする年齢である。だから、気持ちや願いが作品に込められて喜びも大きい。

この時期は人として生きる力の基礎となる心情、意欲、態度などを身につけていく時期でもある。以上の理由から4～5歳児とした。

- (1) 4～5歳児が自力でつくれる「手作りおもちゃ」の材料や適切な素材を選択する。
- (2) 幼児が自分で作り、「つくる喜び」を体験できる手作りおもちゃの題材を工夫し開発する。
- (3) 「手作りおもちゃ」を作ることによって幼児にどのような力が育つかについて実践を通して考察する。
- (4) 作った作品で遊ぶことによって、友だちとの関わりや遊ぶことの意義を考察する。
- (5) 学生も「手作りおもちゃ」を制作し、つくる喜びを体験し、教師として大切な資質は何かを追究する。

4 実践と考察

【1】幼児が自力でつくれる「手作りおもちゃ」の材料や適切な素材を選択する。

まず、今日までに作られている「身近にある材料で作れるおもちゃ」にはどのようなものがあるかを文献から調べる。つくった後で「遊ぶ」おもちゃとしては下記のようなものがあげられる。

【紙類+身近な材料】で作れるおもちゃは

- ・折り紙で遊ぼう ・新聞紙で遊ぼう
- ・飛ばして遊ぼう（紙皿のブーメラン、古内輪ペーパーサート、紙飛行機など）
- ・水に浮かべて遊ぼう（牛乳パックなどの船、カップラーメンや紙コップ、画用紙、プリンなどのからなどから作る船など）
- ・けん玉で遊ぼう（紙コップと割り箸、輪ゴムなど）
- ・投げて遊ぼう（空き瓶や心棒を使った輪投げなど）
- ・魚釣りで遊び（あき箱や磁石、画用紙、糸などで釣り道具と魚をつくる）

- ・紙ずもうや紙笛で遊ぼう（画用紙、空き箱、ストローなど）
- ・木の実で遊ぼう
- ・その他……電話遊び、影絵遊び、ボーリング遊び、動く人形遊び、尺取り虫遊び、動く動車車、たこ揚げ遊び、こま、メンコ遊び、太鼓遊び、動く動物、お面遊び、ぱっちゃんあそび、人形遊び、ビー玉ころがし遊びなどである。

幼児が自力でつくれるものには紙質などの材料や使う道具などに限度がある。幼児が容易にハサミで切ったり、おったり、曲げたりできる適切な材料や道具が必要である。そこで、A幼稚園、B保育園、C幼稚園で使っている材料や道具を調査した。

【紙類を主にした材料】

- ・新聞紙 ・紙コップ ・紙皿 ・折り紙
 - ・画用紙 ・空き箱 ・牛乳パック
 - ・アイスクリームの空箱
 - ・ラップなどの芯 ・ダンボール
 - ・セロファン ・包装紙 ・和紙 ・模造紙
 - ・ラシャ紙 ・クラフト紙
 - ・カラーフォルム ・ミューズコットン
 - ・白ボール紙 ・ティシュペーパー
 - ・カラートーン
- などである。

【紙以外の材料や道具など・その他】主に

- ・うちわ ・空き缶 ・輪ゴム ・わりばし
 - ・木の実 ・クレヨン ・クレパス
 - ・絵の具 ・自然木 ・木の皮
 - ・ホッチキス ・テープ ・ビニール袋
 - ・ビー玉 ・石 ・リボン ・布 ・たこ糸
 - ・ボンド ・フェルトペン ・爪楊枝 ・糊
 - ・両面ダンボール ・ふで ・刷毛
 - ・紙粘土 ・毛糸 ・カッターナイフ
 - ・ひご ・のり ・綿 ・ヤクルトのから
- などである。

上記のように幼児達はすでに各園で多様な材料を扱っている。こうした材料や道具を使った題材を考えたい。下記の写真のように割りばしやトイレットペーパーの芯を使った手作りおもちゃを幼児と共に作った。幼児が自分の力で作り、幼児同士が遊んで楽しむことができた。『実践1』

一つはトイレットペーパーの芯を使って輪ゴムで飛ばして遊ぶ「飛ばして遊ぼう自分の〇〇」である。もう一つは割りばしにゴムを付けて引っ張る。そのゴムにセンタクバサミを通して上下に動かすおもちゃである。センタクバサミには鳥や魚、犬、猫、サルなど好きな動物を描いて貼り付けると面白く動く。幼児は自分の力で作れたことに自信を持ち、飛ばし方や動かし方を工夫しながら自己充実感に満ちていた。簡単に使いこなせる材料で題材を考えることがよかったといえる。



【2】幼児が「つくる喜び」を体感できる「作って遊べる」手作りおもちゃの題材を工夫し開発する。

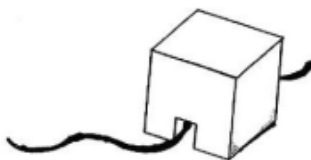
★「ぼくの(私の)〇〇モノレール」

この作り方は「紙おもちゃ全集」に記載されている。それをオリジナルのモノレールにする。自分で名前を付けて「〇〇モノレール」とする。レールも自分で作り、模様も自分で考えて作るおもちゃである。

材料は……牛乳パック、セロテープ、ひも、色紙、セロファン
道具……ハサミ、ひも

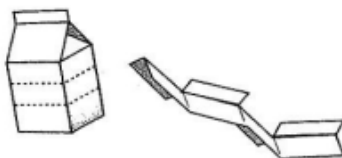
【作り方】

- ①牛乳パックの真ん中に線を引き、ハサミで切る。下の方のみ使う。
- ②上の2カ所に切り込みを入れる。2センチの切り込みを4本入れる。
- ③切ったところを内側に折り、セロハンテープでしっかり止める。
- ④折ったところにひもを付ける。一方は長いひも、もう一方は短いひもを付けて、テープで止める。
- ⑥ひっくり返して車体にする。そこに、自分の好きな柄や模様を入れる。色画用紙を切り抜いて貼ってもいい。



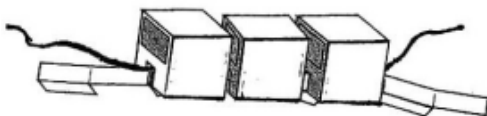
・ヒモを外にして、ひっくりかえす

- ⑦この車体を他に3～4台つくる。車体をひもでつなぐ。
- ⑧牛乳パックの残った部分で車体をのせるレールを作る。切り目を入れる。



・一枚ずつ前後に折る

- ⑨レールをセロハンテープでつなぎ、台の上に並べて好きな長さにする。
- ⑩車体をレールの上にのせてひもを引っばって走らせる。
- ⑪完成図 (図は紙おもちゃの全集より)



D幼稚園の児童12人を対象に実践

『実践2』

●幼児の制作過程の様子

- ・Cはハサミが上手く使えなくて時間がかかった。40%できたのに思い通りにできなくてもう一度挑戦していた。
- ・Cは努力を続けた。「ねえ、きれいに切れたでしょ?」とD児に自慢げに見せている。
- ・Dは「こうしてもっとつなぐとおもしろいよ」「よく動くよ。やったー。できた。」と大歓声。
- ・Dは材料を思いに合わせて切ったりはったりして模様を作り、存分に楽しんでいる。
- ・Cは表現したいもののイメージがなかなかぴったりこないから苦勞していた。
「先生、ここどうすればいい?」「こうしてみようか」とピカチュウを描いた。Cは「面白いやあ」と言ってバイキンマンを描いて貼った。そして、Cは「うん、これでいい。やっとできたよ。ねえ、ここに葉っぱを付けてもいい?」「いいよ。思った通りにやっごらん」葉っぱを付けたら楽しくなったようである。「ああ、きれいなモノレールができるね。」と教師が声をかける。
- ・それを見たDは「ああ、きれいだ。ほくも付けよう」と外に飛び出し、葉っぱを持ってきた。
- ・CもDも作った作品を見合って「ほくのも見て、見て」と自慢している。自らの作品に感動して友だちに見せている姿はほほえましい。

- ・その後、作品を走らせて部屋中を駆けめぐって遊んだ。「競争しよう」のかけ声に「うん、いいよ」と楽しく遊んでいた。
- ・「レール無しでいいやあ」と、部屋中を走り回って遊んでいる。作った幼児はどんと遊び始めた。

【実践2の考察】

- (1) 幼児たちは無意識のうちに「よりよいものを作りたい」「きれいに飾りたい」という表現意欲を表している。そして、活動の楽しさや喜びを体感している様子である。
- (2) 創造表現の能力は自分の持てる力を働かせながら、新しい発想を生み、試行錯誤する中で育つ。葉っぱを付けると面白い。子どもの発想は新鮮である。幼児は常に新しい発想を生み、表し方を工夫する。

こうして作りだす過程の中で幼児の感性や創造性は自然に育まれ、更に創造力、自己表現力が培われる。同時に真剣に主体的に取り組む中で技術や技能も培われていく。

今回も幼児は楽しみながら基礎的、基本的な力を身につけていった。それは「自力で伸びつつある」姿であり、自己実現の喜びを体感している姿でもある。幼児の満足そうな表情はすばらしかった。

- (3) 牛乳パックをハサミで切る時、堅いので幼児は苦勞していた。しかし、教師が正しい持ち方を教えたり、手の大きさに合ったハサミを使ったり、励ましたりしながら苦勞を乗り越えさせた。C児は自分でできたことやハサミを使えたことに満足げな表情で作品作りに打ち込んでいた。あらかじめカッターなどで切りくちを付けておこうと思ったが、C児の頑張りを見て考えが変わった。これでよかったのだと思った。ハ

サミを使い慣れているD児と慣れていないC児は技術面、器用さなどに大きな差があることもよく理解できた。5歳になるまでに道具の使い方にも慣れて作品作りに抵抗のないようにしておくことも大切であることが分かった。

- (4) レールを作ってその上を走らせるようにしたが、固定されて楽しくないようである。子ども達は床の上を自由に引っ張って遊んだ。しかし、レールがないのでひっくり返ってしまう。「輪っばがいいな」と何気なく言うB児の言葉に驚く。車輪を付けて引いた方が自由に楽しく遊べると思った。作った後の遊びの活動を意欲的にすることも大切であることが分かった。

そこで、下記のように改善した。

②【改善と開発】

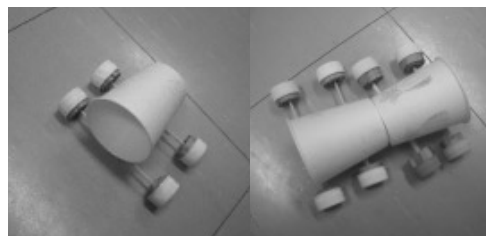
- ア 車輪はペットボトルのキャップを使う。
 イ ダンボールを1センチの幅で30センチ位の長さに切る。
 ウ 切ったダンボールを堅く巻く。テープで止めて、キャップの中に入れる。
 エ それを4個作る。
 オ 渦巻きを中心にボンドでひごを付ける。
 カ ヒゴをストローに差し込み、もう一方の渦巻きを中心にひごを付ける。
 キ 車体の下にストローを取り付けて完成する。
 ク 幼児の発達や実態に合わせて、素材は牛乳カップでなくても紙コップでよいことにする。

『実践3』

★上記のように改善「動く〇〇電車を作ろう」と題材を変えて実践した。

素材を紙コップと牛乳パックのどちらにしてもよいことにして改善した実践である。下記の写真はペットボトルのキャップを使った車輪である。ダンボールをカッターで切るの

は難しいのであらかじめ、25センチと幅1.5センチのものを準備しておく。



同じくD幼稚園の園児を対象に行う。

●幼児の制作過程の様子

- ・ハサミが上手く使えなくて時間がかかっていたC児はハサミにも慣れて上手く使いこなしていた。
- T・「Cさん、ハサミ上手く使えるようになったね」
- ・E児は一つ作ったら「一つでなくて二つ繋ぎたい」という。そうしたいばかりで「はやくやりたい」と焦っている。
- ・F児はヒゴをストローにさしてキャップにダンボールを丸めて詰め込み、輪っばを付けるとよく回るのが面白くて夢中になっている。
- ・G児は「貨物列車にしたい」と言っては箱の中に小さな荷物を作って入れて楽しんでいる。
- T・「Gさんは面白いことを考えたね。荷物をいっぱい入れてどこに行くのかな？」
- ・「爺ちゃんと婆ちゃんが居る青森まで行くんだ」
- ・F児は「見て、ぼくとお父さん、お母さん、妹が乗っているよ」「中でお弁

当を食べるんだ」

T・「Fさんも楽しそうね。家族一緒っていいね」

H・「私も乗せて」「いいよ」「ここにのっ
ていい？」と小さな人形を入れる。

F・「いいよ」

H・「出発待っててね」H「つなごう
か・・・」

K・「みんなのをつなごうよ。長い長い
列車だよ」

L・「D君のかっこいいなあ。つなごう
よ」

・J児は「自分で引っ張りたいたいから嫌だ」という。

・作った作品を見合ってI児は「スト
ローで吹けば動くよ。ほら、こうして
ね。」

・Kは「見て、見てよ。もう倒れないよ」と車輪の棒の長さを同じくしてみたらうまくいった。自ら感動して作品を友だちに見せている。

・その後、作品を走らせて部屋中を駆けめぐる遊んだ。「競争しよう」のかけ声に「うん、いいよ」と楽しく遊んでいた。

これは牛乳パックで作った列車である



【3】「手作りおもちゃ」を作ることによって幼児にどのような力が育つかについて実践を通して考察する。

【実践3の考察】

(1) C児は自分で作ることを繰り返すことによってハサミなどの道具の使い方に慣れ、

ハサミを選んで使うようになった。力のいれ具合もよくなり、上手く使えるようになっていく。また、C児はテープも過去には無駄に使っていた。しかし、今では必要な分を無駄なく使い、ねじれないように使うようになった。智恵が働いて自分に合った使い方ができている。こうして、道具を使う技能が身に付いてくる。手作りおもちゃの利点である。

(2) G児のように作っている内に発想が生まれ、次々に「こうしたい」と言う願いを実現している。また、GやF児のように家族の生活をイメージし、楽しい想像の世界に浸る。F児は夢中になって制作を楽しんでいる。こうした姿は幼児が作りながらイメージを広げ、感性と表現する力を豊かにしている姿である。そこには自分の存在を実感し充実感をもって制作している。これも手作りおもちゃの利点である。

(3) 幼児達は制作後の遊びのことを考えて作っている。作った後に遊びが待っているものは楽しみが続き、その得意げな表情は素晴らしい。素朴な幼児の感性はどんどん広がりを見せている。全身の諸感覚を働かせながら、その中で面白さや不思議さなどに気付いている。H児は友だちの作品のよさにも気づいている。こうして友だちや教師と思いを共有することによって感性は一層磨かれていくことが分かる。

(4) 活動の中でT（教師）は幼児の心の動きや願い、成長を教師が受け止め、認める言葉がけをしている。ことによって幼児は自分の感動の意味を明確にし、自分の成長を体感しているのである。幼児が自己表現を楽しめるように幼児理解を深めることの大切さに気付いた。こうして、幼児は基本的、基本的な力を身につけながら、「自力で伸びつつある」ことに感動をした。

【4】作った作品で遊ぶことによって、友だちとの関わりや遊ぶことの意義を考察する。

●遊んでいるときの様子

キャップで作ったタイヤはよく走る。机の上で息を掛けて走らせている子、「ストローの方がよく動くよ」とストローでおもちゃを動かして遊ぶ子などがある。

- ・貨物列車にしておもちゃを乗せてたこ糸を引き、自分が運転手になって遊んでいる。
- ・電車で家族を乗せている子、友だちと遠足に行った時の気持ちになっている子など、仲良く楽しくおしゃべりしながら遊んでいる。
- ・ほとんどの子が床で自由に動かして遊んでいる。
- ・「いいなあ。ほくも荷物のせる」「ほら、荷物と家族も一緒に運べるよ」と糸をつないで長い列車にして遊んでいる。
- ・「ほくのはタイヤがとれてしまうよ」と嘆く子に先生は「こうしましょう」と、一緒になってとれない方法を教えている。
- ・教師はどの子にも「よく考えたのね」「なるほど、工夫したね」と声を掛けている。遊びに入れたいJ児、K児に遊び方を教えている。自分も一緒に遊び自信と喜びを味わわせている。
- ・J児とK児はやがて、動くおもちゃができて自分に喜びを持ち、友だちと楽しく競争している。

【実践3「作ったおもちゃで遊ぶ」の考察】

(1) 幼児はそれぞれに自分なりに考えて、自分の力でやってみようとしている。まず、自分がやりたいことを持ち、遊びを生み出している。やっている内に目当てが明確に

なってくる。こうして自分の思いが実現するように工夫する力が育ちつつある。

- (2) 幼児の行動や思いをありのままに認めている教師、幼児の心の動きに沿って、幼児を見守り、教師の気持ちや考えを伝えている教師の姿勢は評価できる。自分の思いや考えが受け止められた喜びを味わっている幼児の表情は輝いていた。教師と一緒にじっくり考え、支えられ、認められる充実した時間を過ごすことこそ、幼児が素直に自分らしくのびのびと過ごし、楽しく生きていこうとする力の基盤が育つものであると痛感した。
- (3) 幼児は作ったおもちゃで遊んでいる内に友だちの作品を見て、そのよさに気付いている姿が多く見られた。「いいなあ」「一緒に運べるよ」などの言葉には、友だちの作品のよさに感心し、一緒にのこをしようとする思いが伝わってくる。遊びを通して幼児同士の関わりが深まり、心が癒される。仲良くすると楽しいことや思いやりの心がこうした遊びの中でも育まれていることが嬉しい。
- (4) 自然に友だちと遊びを通して仲良くなっていく姿はほのほのとして心地よいものである。こうして友だちと十分触れあうことによって親しみを持ち、安心して過ごせるようになる。存在感はこうして育つと思われる。
- (5) 幼児は自分にこうと決めたらそれにこだわり、頑固に貫き通そうとする姿も見られた。わがままのようであるが、これは自我が芽生えている姿であり、自分の力でやろうとする意欲の表れであると言われていいる。すなわち、自立へと向かっていく成長の表れであることが分かる。



・上記の写真は牛乳パックを使って貨物列車にして家族や荷物を積んだおもちゃである。

【5】学生も「手作りおもちゃ」を制作し、つくる喜びを体感し、教師として大切な資質は何かを追究する。

『実践4』

★「動くおもちゃを作ろう」の実践

学生は木材を活用して「動く手作りおもちゃ」に挑戦した。

材料は木材、自然の木でも市販の木材を活用してもよい。学習の課題は「木材で動くおもちゃを作ろう」である。

学生は各個人でテーマを持ち、イメージスケッチをした。大学生だから寸法も入れて構想を意図的計画的にまとめる。

教師になろうとしている学生は道具の使い方や道具の特質、使い方のコツ、どんなときに使うと便利であるか等、技術も身につけなくてはならない。学生は自由に自分のイメージを描きおもちゃ作りを始めた。

学生が計画した動くおもちゃは

- ・私は自然の樹木から材料を選び、キリンを表現します。自然木の面白さを活かしたいです。足に車輪をつけて動く。
- ・私はライオンに車を付けて動くおもちゃにします。
- ・バネを利用して首振り羊を作ります。

- ・私は鉄棒をしている人形を作ります。などと目標に向かって熱心に作業を始めた。
- 造形表現を楽しんでいる学生と教師の会話

Y・このキリン頭が大きくなりすぎて立たない。どうしよう。

T・どれくらいの高さが必要かを調べてごらん。

Y・こんなに重いものがいりますよ。

T・ではその重さの人間を乗せて見ようか。人間を乗せたキリンもいいね。

Y・ああ、そうしてみます。ありがとう。

D・先生、バネが長すぎて顔がたれてしまいます。バネの長さを低くしてみます。

T・いい考えね。バネを細くて丈夫なものにしてもいいよ。よく考えてやってごらん。

H・鉄棒をしている人形の足をうまく付けるために、このヒートンを使ったら成功しました。嬉しい。ほら、上手く回るでしょ。

T・ああ、よく回るようになったね。見事ね。

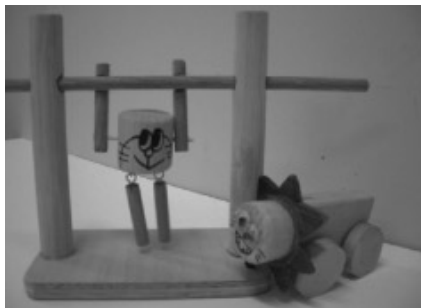
T・Mさん困っているね。それならこの棒を使ってみよう。釘でなく、ここはダボを使ってつなげてみよう。ほら、こうしてダボを使うと便利だね。

M・本当だ。しっかり繋がってかっこいい。

こうした会話が毎時間続く。作品作りにかけた学生の熱心さに感心する。

一人一人の智慧や工夫が活かされた「動く手作りおもちゃ」は学生の感性や創造性が十分に発揮される。

学生Mはスケッチを基に作品をほぼ完成した。自己満足できた作品であり、充実感を味わっている。



・鉄棒とライオンの作品

制作の過程にて教師は常に一人一人の表現活動に寄り添い、共に楽しみながら助言指導をすることを大切にしている。また、取組の様子や作品から、表現のよさや工夫点、努力や苦勞、表そうとしている思いなどをよみとり、言葉を掛けるようにしている。

技法や発想を押しつけない。指示もださない。学生自身に任せた方が個性に満ちあふれ、生き生きとした大胆な作品ができるからである。教師は人の智恵や工夫、発想や感性のよさ、努力している態度などを見つれたり、思いや願いを理解したり、共感したりして言葉をかけるのみで、作品はどんどんよくなる。学生の主体性に任せたのである。

学生は仲間の作品のアイデアの面白さや動きの楽しさなどを感じ取りながら、自己の感覚や感性を高めた。

学生も作ったおもちゃで遊んだ。そして鑑賞しあった。互いに認められた喜びを感じ、自己充実感に浸った。それは、作品を尊重する姿勢が変わった。幼児も学生も作品を大切にする態度は自然に育まれたと言える。自分で作った世界に一つしかない自分のおもちゃには愛着が湧くのであろう。ものを大切にする心はこうした活動をする中で育つものと考ええる。

★作品を鑑賞し評価する。

非常に美しく、夢のある作品が完成した。

学内で作品展示会を開催し、互いに作品を鑑賞して楽しんだ。自他の作品を含め、「作品のよさや美しさ、工夫点、発想の面白さ、表現の技能、作者の意図、努力や苦勞の喜び、失敗を乗り越えた素晴らしさなど」作品の見方、考え方を高め、感性を磨き合った。鑑賞して「よさを見つける」試みは、教師になった時、幼児の作品を温かく受容し、よさを認めて評価する力を付けることになるからである。

そこで、鑑賞表を交換しおもちゃ作りのよさを体感した。

- ・私たちの工夫点や一番表現したかったところをすごく誉めてくれて嬉しかった。
- ・細部の努力や苦勞、表現の面白さまでよく見ていてくれて感激しました。
- ・本物の木を使用して、大きく表現したことや頭が重くて立たなかったときの苦勞も「よく乗り越えたね」と努力を認めてもらってとても嬉しい。
- ・教師になって誉めるときも、制作者の努力点や、気持ち、思っていること、表情のよさなど丁寧に誉めることが大切であると気がつきました。

こうして感じたままを素直に伝え合うことによって、いろいろな見方や考え方があることに気付くと共に、自分なりの感じ方や見方が深められて鑑賞能力も高まったと考えられる。

学生の記録より

★E学生「おもちゃ作りはとても面白い。自分の思いや願いが発揮できて自己充実感を味わうことができた。少し、自信がついた。」

★T学生「自由に思いのままに制作することの楽しさを味わった。「自分の力でできる」ことの喜びは幼児も自分も同じである。

作っている間に自分の感性が磨かれており、自分の創造性も高まったと思う。」

- ★M学生「楽しんで作っている雰囲気こそが創造性を伸ばすことに大きな役割を持っていることが分かった。」
- ★S学生「本来持っている力が十分に発揮できるような、また、幼児や児童の願いが達成できるように適切な「言葉がけ」や「適切な助言」ができるように力を付けることが大切であると思った。」
- ★H学生「今まで知らなかった自分を発見できた。今、満足度100%。作品のよさや美しさ、努力や工夫などを認める「鑑賞の仕方」が学べて嬉しかった。」
- ★Y学生「自分が創る楽しさを体感して、「自ら学ぶ」ことの大切さに気付いた。これが「子ども主体」の活動であることに気付いた。」
- ★W学生「夢中になれた。私は失敗から学ぶことができた。道具の使い方も含めて自分に不思議な力が付いたようだ。自信となった。とても嬉しい。」

5 まとめ

本研究は作って遊べる「手作りおもちゃ」の制作を通して育つ力は何かについて、実践を通して追究した。

- (1) 手作りおもちゃを通して幼児が育つ力として次のような点があげられる。
 - ①幼児が使いこなせる材料を準備し、材料に対する抵抗感をなくして実践をした。幼児は存分に自分の表現活動を楽しむことができた。それは、「自分の力でできる」ことに喜びと自信を持つことができたのである。造形活動をすることによって「目的に向かって主体的に作り続ける態度や集中力」が育成される。
 - ②色、形、材質などの組み合わせなど、目標

達成の制作過程において一人一人はよく考え工夫し、試行錯誤する。その中で幼児の視覚的な思考力や判断力が培われている。また、発想力、イメージ力、創造力が育成され、つくりあげた喜びは感動となり心を癒す。それは心身の調和的な発達を促すものでもある。

- ③手作りおもちゃは道具を使わねばならない。切りすぎたり、切る場所を間違えたりして失敗しながら乗り越えていく。材料や道具の扱い方にも慣れて造形感覚や技能が身に付く。そして、より美しく仕上げようとする美的感覚が育つ。
 - ④制作の過程で教師が一人一人の努力や差、苦勞に励ましと、支援、賞賛の言葉がけをすることによって、自分に自信と夢や希望が湧く。それは「生きる力」の基が育つ。
 - ⑤作った作品で遊ぶことによって、遊び方を工夫する。遊びを通して智恵や思考力がぐんぐん伸び、ものの見方考え方が幅広くなる。また、自分が苦勞して作ったからこそ作品に対する愛着を感じ、作品を大切にする心も育つ。
 - ⑥幼児は自分の五感を使って真剣に作っていた。「ふーん、これで車に変身だね」「わあ、よく動く。おもしろいやあ」等とつぶやき、工夫すれば車輪にもなることや、自分の発想でモノレールにもなり、貨物列車にもなることに感動している。新しい発見や不思議の面白さに興味感心、創造性、追究心が育つ。
 - ⑦仲間と共に遊ぶことによって、友だちの作品のよさを感じたり面白さを見つけたりしている。そして、仲間との関わりが自然にできるようになり、人間関係が深まる。
- (2) 教師の役割としては
 - ①幼児が描くイメージの世界を十分に楽しめ

るように多様な道具や素材を用意し、自由に作れる場を確保し、「つくり出す喜び」を体感させることができるように環境を整えることである。

②幼児は作りながら「何で動くの?」と疑問を持ったり「どうしよう。こうしてみよう」と工夫したり、「わあ、こうすれば動くんだ」などと感激したりして五感を使って活動を楽しんでいる。幼児は活動を通して常に発達している。失敗も自力で解決していく力を持っている。この過程は自我の形成にとって重要である。だからこそ、教師は一人一人を受容し幼児が何に心を動かし、何を表そうとしているかを受け止めながら、自己表現、自己充実感を十分に味わわせるようにすることが大切である。

③幼児が人と関わる力の基礎は、自分が教師や友だちから温かく受け止められているという安心感である。この安心感があるからこそ一人一人は伸び伸びと自分らしさを発揮できるのである。教師は幼児の行動や思いのありのままを認めながら、必要な時には教師の思いや気持ち、考えを言葉や行動、表情などで表現し、教師との信頼関係を築くよう努めることが大切である。

同時に、幼児が様々なことを自分の力で行う自立の精神を育てることを常に心がけていることが大切である。

手作りおもちゃの実践を通して上記のように「幼児が手作りおもちゃで育つ力」「教師の役割」をまとめることができた。

学生は作る喜びを体感しながら自らの学びを上記の「学生の記録より」に示したように記録に残した。教師になるための道のりはまだ遠いけれど、この大学の授業を通して、感性や表現力、想像力を自らの力で高めることの大切さに気づいた。仮説の(1)~(5)の実践研究を通して、学ぶ喜びを体感し、その意義を理解したと思われる。

そして、自らの感性や創造性を少しずつ高め新しい自分を発見することができた。

今後の課題

★幼児の考えや表現したいと思う心の動きを受け止めて適切な「言葉がけ」の在り方を研究し、自らも支援できる力を付ける。

★理論と実践の関連の大切さと充実感、達成感を味わう「手作りおもちゃ」の活動を広げ新しい開発をする。

★更に自らの感性を高め、発想を豊かにする。

参考文献

- ・幼稚園教育要領 文部省科学省
- ・「つくりだす喜び」藤沢典明著 造形社
- ・「造形教育事典」真鍋一男著 建幣社
- ・おもちゃ大全集 加藤令子著 学芸図書
- ・「図解遊び事典」飯野陸毅発行 東洋出版